

【実践報告】

感染予防に配慮した課外活動支援

「学生支援プロジェクト事業」の実施を振り返って

白村 直也

岐阜大学教育推進・学生支援機構

要旨

本稿は令和4年度 岐阜大学教育推進・学生支援機構学生支援センター主催「令和4年度基盤的能力を育成する学生支援プロジェクト事業」実施に関する実践報告を記すものである。令和2年度からの新型コロナウイルスの感染拡大が大きな社会問題となる中、感染防止に最大限注意を払いながら、学内募集、中間発表会、そして最終発表会を通じて学生の課外活動を支援してきた経緯をここに振り返る。

キーワード：課外活動，学生支援プロジェクト，基盤的能力，コロナ禍

1. 岐阜大学基盤的能力と課外活動の関わり

岐阜大学は、社会で生涯にわたって高度な専門職業人として活躍するために学生に身につけてほしい力として「基盤的能力」（「考える力」、「伝える力」、そして「進める力」）を掲げている。この力の修得を目指し、正課における授業の実施に並行して学生の多様な自主活動を支援することを通じて各個人の成長を促すことを目的に、正課・正課外を問わず様々な取り組みが全学的になされている。正課外での取り組みとしては、サークル活動をはじめボランティア活動といった学生の自主的な活動を大学として支援する体制作りがなされている。本稿が触れる「学生支援プロジェクト事業」というのは、岐阜大学教育推進・学生支援機構学生支援センターが執り行う事業の一つであり、そうした学生の自主的な課外活動を経済的に支援するものである¹⁾。

2. 学生支援プロジェクトの実施とコロナ禍

学生支援プロジェクトは毎年実施される、基盤的能力の修得を促すため、学生の発意によって提案・実施される魅力ある独創的な「社会貢献活動」と「研究活動」を経済的に支援す

る事業である。その目的は「学部生又は大学院生（以下「学生」という。）が創造する学生のための自主的活動を支援することにより、学生生活の活性化に資するとともに、岐阜大学の学生として共通して身につけてほしい力、すなわち基盤的能力（「考える力」「伝える力」「進める力」）の育成を目指す」（公募要領）ものである。例年3, 4グループのプロジェクトを採択し、上限10万円の支給をもって支援している。令和2年度までは学部生のみを対象としていたが、令和3年度以降は大学院生も対象に加えて実施することとした。支援の対象については公募要領に次のように記されている。

- ① 学生が提案し自ら実施するプロジェクトであること。
- ② プロジェクトの成果が他の学生の学びにも資することが期待されると同時に、次のいずれかに該当するものであること。
 - (ア) 岐阜大学の学生を構成員とし事業の対象とするもの
 - (イ) 「社会貢献活動」：岐阜大学キャンパスを事業（活動）の対象とし、社会貢献活動を通じて基盤的能力の育成が見込まれるもの（学部生対象）
 - (ウ) 「研究活動」：研究活動を通じて基盤的能力の育成が見込まれるもの（大学院修士・博士課程対象）
 - (エ) 岐阜大学の公益、共益に資するもの
- ③ 提案者自身の基盤的能力育成が図られるプロジェクトであること。
- ④ 支援対象分野は特に限定しない。
- ⑤ 応募資格は、本学に在学する学生3名以上で構成する団体とする。

「社会貢献活動」は構成員の過半数を学部生、「研究活動」は過半数を大学院生で構成することで学部生と大学院生混合の団体を構成することができる。

例年4月終盤から5月上旬に学内募集を開始し5月に応募を締め切るようにしているが、令和4年度は令和2年度から引き続き新型コロナウイルスの感染が社会的に拡大し、その影響で課外活動も極力制限される状態が長く続いた。感染予防に最大限注意を払いながら、

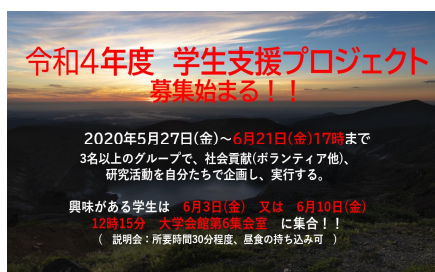


図1. モニター画面での周知①

図中6月21日（金）となっているが、正しくは（火）である。

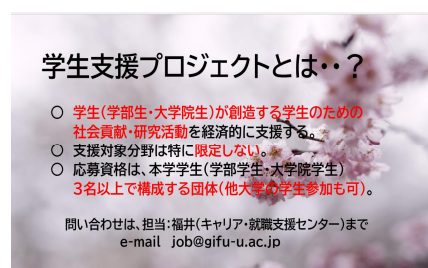


図2. モニター画面での周知②

ようやく実施の運びとなったのは、6月1日（水）になってからのことであった（締め切りは6月21日（火））。学内への周知は全学共通教育事務室と学生会館1階キャリアセンター前の電子モニター、そして学務情報システム上で実施した（図1, 2）。

応募を受け付けるにあたっては、事前に説明会を設け、応募を検討する学生グループには説明会への参加を義務付けたことになった。説明会は6月に2回（6月3日（金）と6月10日（金）12時から13時、大会館2階 第6集会室）実施し、申請書の書き方と経費の執行方法について説明をした。

6月21日の17時に受付を締め切り、計6件の応募を申請書の送付をもって受け付けた。そして申請された各プロジェクトについて、令和4年7月6日（水）15時から全学共通教育棟1階 commons 1A/1B 教室にて審査会をすることとなった。会では各グループにプレゼンテーション10分、審査員からの質疑応答5分の15分程度が充てられた。プレゼンテーションには、プロジェクトの内容他、具体的な活動日程、そして必要経費の細目が組み込まれ、以下の観点から各項目5点満点で評価された。○魅力的であるか、○独創性があるか、○実施場所は大学内であるか、○学生が自ら行うものであるか、○岐阜大学の学生を対象としたものであるか、○岐阜大学のキャンパス全体を対象としているか、○岐阜大学の公益、共益に資するものであるか、○提案者の「基盤的能力」育成が意識されているか、○学生3名以上のグループであるか、○事業の実施期間は年度内であるか、○経費の執行期間は、令和5年1月末までであるか、○キーワードに合致しているか（支援対象事業キーワード例示：「キャンパスボランティア」、「広報」、「エコ」、「環境美化」、「マナー啓発」、「学修支援」など）。今回の学生支援プロジェクトは学生支援センター主催ということで、横田学生支援センター長他委員の先生方に審査員を依頼した。

審査会当日は問題なく進行が進み、どのグループも新型コロナウイルスの感染拡大に留意しつつ活動内容を練っているのが窺え、力のこもったプレゼンを披露してくれた。予定時間内に審査会は終了し、結果は後日通知することとし、会は閉会となった。後日審査員からのコメントを付した形で、グループ代表者にメールにて結果を通知した。令和4年度は、応募があった以下5グループが採択された。以下、各グループの活動目的と概要を申請書の内容から掲載しておく。

1. 新スポーツ『コースタルローイング』の普及と活性化

- 活動目的：① マイナースポーツである『コースタルローイング』の普及
② コロナ渦で衰退気味の岐阜大学内外の運動部の活性化—多くの人々を元気付けたい！！

活動概要：新しいスポーツ『コースタルローイング』の国内大会に出場し、岐阜大学でのスポーツ分野での活躍をリードする。また、『コースタルローイング』の知名度を向上させるためのSNS運用を中心とした広報活動をする。

2. バスの混雑解消に向けて

活動目的：岐阜バスの待ち時間の緩和

活動概要：現在、7:40 頃発車の岐阜バスの待ち時間は平均 24 分である。一方 7:00 頃発車のバスの待ち時間は平均 2 分である。岐阜バスの待ち時間に関する課題は長らく改善されていない。そこで、まずは学生の意識の変化を目的に今年度は啓発活動に努める。

3. まちに居場所をつくって地域社会へダイブしよう！

活動目的：自主的な地域ラボの利用を促進し、学生が実社会や地域とのつながりを創出する学びの場としての社会関係資本を構築することを目的とする。

活動概要：学生にとって立ち寄る意味のある空間を市街地に自分たちでつくり、運営することが、地域社会へ実質的な貢献を展開する鍵と考えた。そのため、学生が主体となって居心地のよいサードプレイスとしての空間設営を構想し、力をあわせてその創造を実践することで、その場所と人、人と人の相互の関係をつくる。さらに創り上げた空間を拠点に、まちなかへ開き、活動を学内外に対して継続的に発信して、躍動感のある地域とのつながりを持つことができる。

4. giftus (ギフトス) 2

活動目的：岐阜市の学生の横のつながりをつくることによって、学生がより挑戦できる環境を作る。

活動概要：giftus は岐阜市の学生の横のつながりを築くことができるコミュニティーだ。主な対象は、岐阜市内の何かに挑戦してみたいと考えている大学生である。リアルイベントと SNS コミュニティーを掛け合わせることで、学生同士の交流を活発にするとともに、情報の集積地として機能し学生に挑戦の機会を提供できるようにする。

5. 学内の植物マップ作成と情報発信（鶴ヶ池自然再生プロジェクト 2022）

活動目的：・学生や教職員、地域住民の身の回りの自然環境に対する関心の向上
・キャンパス緑地や学内樹木マップの利用促進

活動概要：すでに作成されている樹木マップの情報追加や更新を行い、利用しやすくする。リーフレット等の配布によりキャンパス内の緑地の利用促進を図る。

審査会終了後に学生支援センターよりグループの代表学生宛てに採択通知が出され、以降各グループの活動が開始となった。

3. 中間発表会の開催

始動したプロジェクトは、経費の執行についてはキャリア・就職支援センターに確認を取りながら進められた。令和4年12月7日（水）15時より commons 1A 教室にて中間発表会を開催した（図3）。各グループの代表に再度集まってもらい、採択されて以降のグループの活動内容について15分のプレゼン（発表は10分、質疑応答は5分）を披露してもらった。どのグループも新型コロナウイルス感染予防に最大限注意を払いながらも確実にプロジェクトを進めており、会場からはいくつか質問の他、各グループに対して温かい声援が投げかけられた。

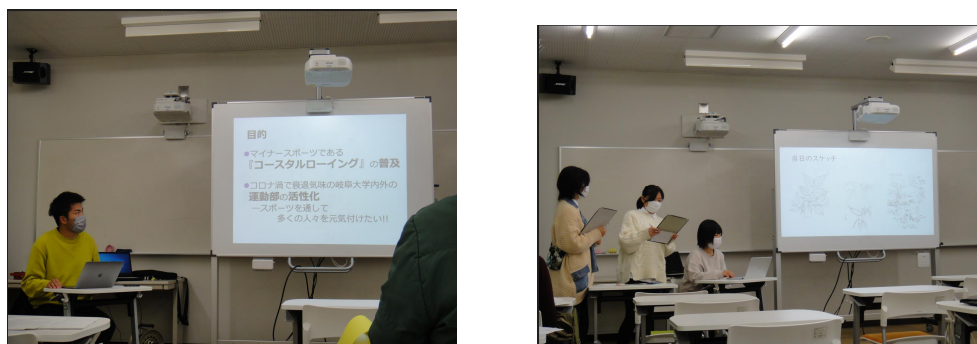


図3. 中間発表会の模様

4. 最終発表会の開催

令和3年度の学生支援プロジェクト事業の最終発表会が令和5年2月21日（火）、13時半より commons 1A 教室で開催された。方法は中間発表会と同様とし、各グループで10分間の発表に加えて質疑応答の時間を5分設定した。

1. 新スポーツ『コースタルローイング』の普及と活性化



図4. 発表風景 ①



図5. 発表風景 ②



図 6. 発表風景 ③



図 7. 発表風景 ④

(審査委員からのコメントと学生の回答：事業成果報告書より)

(委員からのコメント)

- コースタルローイングとボート競技との違いは何にあるのか。
(学生の回答) コースタルは主に海で行うのに対し、ボートは川で行うものである。
- 活動を発信する上で工夫した点は？
(学生の回答) 自分たちで文章を考えて発信するようにした。
- 本プロジェクト終了後の活動については、どのように考えているのか。
(学生の回答) 来年からは全国で大会開催が増えるため、積極的に参加していきたい。

2. バスの混雑解消に向けて



図 8. 発表風景 ①



図 9. 発表風景 ②



図 10. 発表風景 ③



図 11. 発表風景 ④

(審査委員からのコメントと学生の回答：事業成果報告書より)

(委員からのコメント)

- 自転車通学が拡充すれば、バス通学の混雑が軽減される可能性が高まるように思う。
(学生の回答) キックボードの利用を始め、バス以外の利用を拡充していけるように、活動を進めていきたい。
- 行列を整理するための係員を配置してはどうか。岐阜バスや行政の反応はどうか。
(学生の回答) 市長含め、混雑が問題であると認識されているため、引き続き働きかけをしていきたい。
- ホームページなどの管理体制はどうなっているか。
(学生の回答) グループメンバーで共同して管理するようにしている。

3. まちに居場所をつくって地域社会へダイブしよう！



図 12. 発表風景 ①



図 13. 発表風景 ②



図 14. 発表風景 ③



図 15. 発表風景 ④

(審査委員からのコメントと学生の回答：事業成果報告書より)

(委員からのコメント)

- ラボの使用は、学環の学生しか利用できないのか。先輩から後輩への引き継ぎ体制はどうか。

(学生の回答) 今後幅広く利用できるように検討していきたい。また私たちの活動自体を他の学環の学生に広く知ってもらうことから始めたい。

- このラボは現時点では稼働率、時間はどの程度か。

(学生の回答) まだそれほど高くはない。今後イベントなどを増やし、稼働率を上げていきたい。

4. 学内の植物マップ作成と情報発信 (鷺ヶ池自然再生プロジェクト 2022)



図 16. 発表風景 ①



図 17. 発表風景 ②



図 18. 発表風景 ③



図 19. 発表風景 ④

(審査委員からのコメントと学生の回答：事業成果報告書より)

(委員からのコメント)

- 冊子の中にケヤキの記述がないようだが。
(学生の回答) ケヤキ並木など、あまりに誌面が煩雑になってしまいそうなものについては、検討した上で誌面を作成するようにした。
- 冊子を作ってみて、岐阜大学の植物について気づいたことなどはあるか。
(学生の回答) 大学の敷地内にこれだけの植物があることに、まず驚いた。非常に魅力的なキャンパスだと思う。
- 冊子の利活用については？
(学生の回答) 作成したばかりでまだ決めていないが、今後グループの中で話し合い、決めていきたいと思う。

4. おわりに

「令和 4 年度基盤的能力を育成する学生支援プロジェクト事業」は昨年度に引き続き新型コロナウイルスの感染拡大に多大な配慮をしつつ実施された。各グループの活動は非常に興味深く、グループの中で丁寧に話し合いを重ねつつ計画を進めてくれた。ただ、企画が採択されたのちに様々な事情から辞退せざるを得なかったチームがあったことは悔やまれることだった。責任を持って最後まで自らの計画を完遂することも、基盤的能力を培い、今後社会に巣立っていくことを考えれば非常に重要なポイントであることに変わりはない。平日頃のグループリーダーとの意思疎通を図っていきたいと考えている。

最終報告会の模様は本文に記したとおりだが、今年度はどのグループも、自分たちが取り組んだことをどのように学内外に向けて発信するかが、共通する 1 つのテーマだった。SNS を活用するグループもあれば、紙媒体で制作し広く配布したグループもあった。どのグループも、自分たちの言葉で、そして見やすいものとなるよう心がけていたのが非常に印象的だ

った。そうしてまかれた一つ一つの種が今後どのような形で花を咲かせるのか、注意深く見守っていきたい。

同時に、どのグループも本学生支援プロジェクト終了後も継続して活動を進める考えを示してくれたのは、非常に心強いことだった。先輩から後輩へ活動が引き継がれ、さらに発展していくように支援をしていきたい。

【注】

- 1) 本実践報告は、昨年度（令和3年度）の報告書を下敷きに執筆したものである。したがって、昨年度から変更がない点については、記述内容を踏襲していることを断っておく。
- 2) 本グループについては条件付き採択となったのち、学業との関係で辞退の申し出があった。